

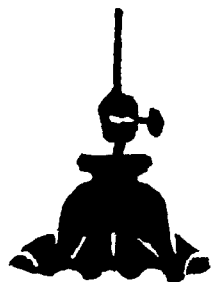
書下し長篇小説

ワルツ

重兼芳子



㊦



ワルツ

重兼芳子

著者略歴

昭和二年、北海道に生れる。福岡県立田川高女卒業。五十四年七月、「やまあいの煙」で第八十一回芥川賞受賞。主なる著書に『やまあいの煙』『透けた耳朶』『うすい貝殻』『ジュラルミン色の空』がある。

ワ
ル
ツ

昭和五十六年九月二十日 第一刷

定価一〇〇〇円

著者 重兼芳子

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三二二三
電話〇三二六五一二二一

印刷所 理想社印刷

付物印刷 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

目次

第一章	埋めた小石	5
第二章	等身大の自由	89
第三章	ワルツ	167
	あとがき	236

装
幀

山
高

登

ワ
ル
ツ
〈書下し長篇小説〉

第一章 埋めた小石

玄關の門灯はまだ点ってはいない。

里子は門の前に立ち止って、十メートルほど先の玄關を見ていた。あの格子戸を開ければ家族がいる。

父の信吉と母のとみ、それに兄の浩も学校から帰っていることだろう。門を一步入れば一步家に近くなる。家族の傍に近づくことになる。

門に続いた両側は板塀で仕切られ、路の奥には大きな八つ手が葉を拡げている。門から玄關までの十メートルほどの路に足を踏みこむとき、里子は大きな深呼吸をする。門の外までの緊張感をそこで吐き出し、別の緊張へ入るための準備の場所でもあるからだ。

里子は門の外であつたできごとを、玄關までの十メートルで振り払おうとする。小砂利を敷いた路をゆっくりと踏みながら、体にまといつた埃を小砂利の上に払い落す。

門の外ではろくなできごとがなかった。今日も学校で叱られつ放しの一日を過した。里子がつまっている県立女学校では、開戦と同時に体操の時間を週二時間から週六時間にと殖やした。一日置きに体操が二時間ずつ時間割りの中にくり込まれることになった。

英語や数学の時間を少なくして校庭の草むしりや校舎の清掃をよくするようになった。体操の教師が校内で幅を利かし、発言力が強くなった結果そうなったのだ。

里子は教室に大きく張り出されている、「精神一到何事か成らざらん」という字を眼の隅で読んでは体を立て直し、精神を引き締めようとした。精神を引き締めさえすれば、苦手な体操の授業もうまくこなせると信じていた。

今日の体操の授業は女教師の番に当たっていた。体操は男女二人の教師がいて交互に授業を受けるようになっていた。女教師は生徒を雨天体操場いっぱいになるほどの、大きな一列の輪をつくらせた。山猫のように敏捷そうな体付きでステップを教えた。

右の足を一步出し次の一拍で右の踵に左の爪先をつける。そのときはすでに右脚が一步先に出ている。左脚を大きく一步出してその踵に右の爪先をつける。

女教師はフレイヤーのたっぷりついたキュロットスカートの裾をひるがえして、軽やかにステップを踏んでみせた。実に簡単なステップなのである。

これほど分り易い説明はないと思われるほど丁寧に説明しながら、何度も手本をやってみせた。口で号令をかけ手拍子を取りながら生徒にもやらせた。

「もうできない人はいないでしょう。では音楽に乗ってやりましょう」

一列の輪はリズムに乗ってステップを踏みながら右廻りをはじめた。

里子はなるべく目立たないように、前の人との間隔を詰めてぎこちなくステップを踏んでいた。ブルーマーをはいてむき出しになった、太腿の白い肌に視線を落していた。青く走った血管を見ている。

「眼を伏せないでまっすぐ前を見るっ」

女教師の声は大きくて太い。

「その背中を丸めた子、ここに出てきなさい」

指さされているのが自分だと里子は直感的に悟った。おそろおそろ眼を上げて女教師を見ると、やはりまっすぐに眼は里子を射すくめていた。里子は輪の中央に引き出されることになった。

「ゆっくりリズムをとってあげるから、それに合わせてステップを踏みなさい」

いちっにつきさん、にいにつきさん。女教師は大きなゼスチュアで手を叩く。里子の脚はゆかに粘りついたように動かない。

女教師は掌で自分の右脚をぽんと叩き、

「ほら、いちっで右脚を出すの。そう、左脚の爪先を踵にほら」

里子の左脚はかなり前から重くてたまらなくなっていた。肉の付きぐあいが左右違うわけではない。むしろ里子が重いと感じる左脚の方が、較べてみると心なしか細いのである。体積や重量の問題ではなさそうだ。

号令とともに左脚を出そうとする意志はすぐに働くし、体の中にはリズムも軽く鳴っている。リズムに体が乗るのはやさしいことなのだ。

それなのに動かそうと里子が意志を持って、何秒か決心をし左脚に伝達をしなければ、動いてはくれない。そのときはリズムがすでに先の方へ走っている。

女教師は里子の横にぴたっと寄り添いながら、どうにかして覚えさせようと親切に教えてくれた。里子はようやく列の中に戻されて音楽がはじまる。今度こそできるだろうと女教師は期待をこめて見ている。

胴体で感じている音楽がどうして手脚まで伝わらないのだろう。輪の中では里子のテンポの遅

れがますます目立つようになり、女教師は顔を真赤にして怒り出してしまった。

「よそのクラスでは、もうとつくに次の複雑なステップを教えているのに、このクラスはなんですか。一人の生徒の精神がたるんでいるために、クラスの厄介な荷物になっている。ここが戦場ならば、一人の不心得者のために中隊全員が戦死という事態になることです。クラス全体の連帯責任として、その不心得者の精神を叩き直さない」

太くて低かった女教師の声は、高くてヒステリックな声に変った。雨天体操場のまんなかに仁王立ちになったまま、授業時間が終るまで説教が続いた。音楽に乗って体を動かしたい級友たちは、たまりかねたように足踏みをして里子を恨めしそうに見ていた。

「やる気がないのなら授業になんか出なくてよろしい。教室に帰って自習していなさい。全く精神がたるんでいる」

里子は顔をほてらせて、うつむいたまま体操場から出た。

そんなことがあって放課後職員室に謝りに行き、そこで女教師から精神訓話をたっぷりと受けた。怠惰で不真面目な生徒は敵を助けているのと同じだと言われた。利敵行為をしたくないのなら、戦場で戦っている兵士と同じ気持ちになるようにと女教師は眉毛を上げて里子を見た。

里子は重い左脚を持ち上げるようにして、ようやく夕方遅く家に帰ってきた。

門から玄関までの路は、そんなできごとを吐き出す路である。南側の陽当りのよい路ならば、里子はまぶしくて体を縮めてしまうだろう。北側の湿った路だから里子はほんと気を抜くことができるのだ。学校や道路から一步踏みこんだところ、そして家族がいる家の中までまだ距離が保てるところ。その境界に当るからほんと体勢を立て直す。

里子は学校や道路と別の種類の緊張に入ってゆくために、なるべくゆっくりと砂利路を移動す

る。

家族が夕食の膳についていた。

「あら、醬油持ってくるの忘れた。里子、取ってきて」

ととみが言った。里子はちゃぶ台に両手をつけて、のろろと立ち上る。

「女の子のくせにいやいや立つのでは、全く可愛げがないんだよ」

とみの声が飛ぶ。里子もほんとうにそうだと思った。今からおいしいものを食べようと家族が心を和ませているときだ。里子はなるべくその雰囲気をごわしたくない。

言われるまでもなく醬油さしを取りにゆくことくらい、里子にとつてはなんでもないことなのだ。意志はすでに台所の戸棚に飛んでいる。けれども体だけが居据わっている。里子はようやく立ち上って台所の方へ行こうと右脚を踏みこむ。続いて重い左脚をよいしょと持ち上げようとする。

「目上のものが頼んだことを気軽にしてこそ人から可愛がられるの。頼んだことをさも大儀そうにいやいやしてもらっても、少しも嬉しくない。自分でした方がずうっと気分がさっぱりするわ」

とみは体をすっと浮かして立ち上った。その動作は一瞬のもので、あつという間もない。脚はすり足で敏捷に動き体はすぐに台所に消える。言葉だけがあとに残つてとみの体はすでに台所にある。立ち上ろうとする意志より早く、体の方が意志を先取りして動いてしまう。とみの体はばねのようだ。里子の鈍くてのろまな動きにいら立ちをとみが覚えたとき、すでに爪先は一步前に踏み出している。いつもとみが口癖にしているように、体の方が氣持を先取りして動くのが女ら

しいあり方なのだった。

「突っ立っていないで坐りなさい」

とみが里子を叱る。今から又説教がはじまりそんな予感がある。

「とうさんは子供の教育に口出ししないでください」

早くめしにしようやと言いかけた信吉に、とみがぴしゃっとたしなめた。そして女は心が次第で幸福にもなれば不幸にもなると、いつもの口癖で説教がはじまった。信吉と浩は、里子に向けられたとみの説教が終るまで、箸を持ったまま食事はお預けにさせられている。

女学校に入った頃から里子は脚の重さに気がついていて、それと同時に体を曲げる動作をするとき、意志の方が先走って体がつんのめってしまふことが度々あった。父の信吉の転勤で、生れ育った北海道から九州の筑豊に引越してきた時期と重なっていた。九州という土地そのものが、植民地的な北海道と較べて重苦しくうつとうしい所なのである。人と人との関係にしても、入りくみ合ったものが幾重にも重なり合って、一人一人が他人の影を何人も背負いながら生活しているようなところがあった。身一つで故郷を遠く離れた人たちばかりの北海道と、何代もの先祖の歴史が土地に染みついてゐる九州では、あまりにも違いが大きい過ぎて里子は戸惑うことが多過ぎた。言葉や習慣が外国に放り出されたほどに違っていた。

体が重いのは九州という土地柄のせいばかりではないと、里子はうすうす気が付こうとしていた。右脚をとんと踏み出し、その次に左脚を踏みこもうと持ち上げるとき、股関節のあたりに重石をくくりつけたような感覚がある。

さあ、左脚を持ち上げるぞと自分に確認し、よしと盛んに命令する。そうしてようやく左脚が

胴体に従ってくる。里子が意志を持ちはじめてから動き出すまでの間隙が、かなりの大きさとなつて開いている。ふつうの人は間隙が全くない。

里子から見れば他人はどうして簡単に体が動くのだろうか、それがふしぎでならないのだった。股関節という体の一つの動きが鈍いと、その鈍さは体全部に伝達されるものらしく、里子は怠惰でのろまな娘であつた。

やはり心がけが悪いせいだ。どこかで怠けようとするずい考えを持つから、人並みのすばしい動きができない。里子は他人の動作を見る度に自分にそう言い聞かせていた。

「里子は腰が重過ぎるのよ。いつも腰を浮かせ気味にしていること。目上の人から命令されたら間髪を入れずに体をこまめに動かしなさい。いいわね」

将来嫁にもらわれて、婚家先の舅姑や夫に仕える身になったとき、こまめな嫁だと可愛がられるようになりなさいと、とみは必ず説教のあとにそうつけ加えた。それが里子の一生の幸福につながると思ひこんでいるらしい。器量も悪く成績のよくない里子がいいとこに嫁にゆくには、愛嬌があるか、こまめなことくらいしか取り柄はないとつけ足すことを忘れなかった。とみは自分の方法で里子に幸福な人生を送らせようとしていた。

いくらとみが躍起になつても、里子ののろまは一向によくならない。この頃ではあたりをはばかりに寝そべることがある。股関節に胴体の重量がかからない姿勢は、寝そべって体を横にするしかないからだ。体を縦にすると必ず重力は下の方にかかつてしまう。なにしろ胴体とその上にのつかる頭、両手の重さだけで股関節にかかる負担はかなり大きい。重力を横に散らせば、なにごとくなく負担をはずすことができる。里子は畳の上に寝そべることになる。

信吉や浩も同じポーズをとり、寝そべって新聞を読んだり雑誌を読んだりする。とみは決して

顔をしかめることもなく笑いを浮かべて二人を見る。しかし寝そべった里子をみつけると、とみはいきり立って女の子がそんな姿勢をしたらいけないと言う。

信吉は新聞を拡げて読みながら、女の子の躰は母親に任せっきりになっているというように、小言を聞いていないふりをする。浩は手ずれのした単語カードを手の中に握って、眼をつぶっては覚えている。

「ここにこうして爪先を重ねるの」

とみは自分の爪先を尻の下に重ねて里子に見せる。

「爪先を重ねると尻が浮き気味になるでしょう。その上にとお尻をのせとくだけ。目上の人から名前を呼ばれたらね、先ず爪先を先に立てるの。そうすれば反射的に腰が浮き返事をしたときは立ち上っているの。女の子の躰の根本はそれなのよ」

とみは里子にだけ要求しているのではない。生活の中で自ら模範を示している。決して口先で小言を言うのではなく、体験的な厚みがある。里子が反撥する隙を決して見せようとはしない。

体を縦にして爪先立ちで坐っていることが、なぜ女の幸福につながるのか里子には理解できない。体の向け方が縦か横かだけなのになぜ目くじらを立てるのだろうか。そんなささやかな里子の疑問など、とみの実力の前では簡単に吹き飛ばされてしまう。

「肘枕で寝そべるなんて、娘のすることではありません。人に見られたらどうするの。親の顔が見たいと笑われるわ」

里子はのろのろと起き上り、横に散らした体の重みを再び股関節にかける。動くのが億劫な里子の性分は劣等感となって体の中に溜ってゆく。

とみはいきりつと着物を裾短かに着て、体を上下にも左右にもすばしこく動かす。動きに少しの

無駄もなく最短距離を最短時間で体を運ぶ。里子とはみの動きを眼で追いながら、どんなに気持を引き締めてもとみには叶わないと思う。実力のある人が傍に居るだけで、その圧迫感に打ちひしがれそうになる。

里子は全身でとみの気配をうかがい、とみの視線が消えているときに、いつときでも体重を横に散らそうとする。軽くて足早なとみは猫のように音もなく姿を現わす。里子とはみの気配に敏感になり、姿を現わす一瞬前に体を立て直す。いつもとみの視線を意識し、絶えず緊張しながら生活している。

学校での緊張とは別の種類の緊張が家の中にある。里子は無意識のうちにいつも息が抜ける場所を探し、人眼につかずに体を横たえる隙間はないかと眼を走らせている。

門から玄関までの路に陽が射すのは少しの間だけである。小さな白い砂利はいつも湿っている。水はけが悪くて雨が降る度に床下から溢れてくる雨水が路に溜り、ぬかるみようになって小砂利が浮き上る。雨が降ると信吉やとみは塀に沿った端の方を爪先立ちで歩いては、困ったものだと言いつつ合った。

里子は外から帰ってきて湿ったこの路に入ると、立ち止って肩の力を抜いてしまう。白くて地味な八つ手の花や、砂利の上にこぼれた白い花卉の前にうずくまるようにしゃがみこむ。明るい灯が点っている家の中より、八つ手の葉の薄暗い陰の方がいい。

里子は犬になれないかと考えていた。犬ならばこのあたりに犬小屋を置いてもらって、湿った土の匂いを嗅ぎながら眠るだろう。白い小さな花卉を体中にまといつかせて、小砂利の上にながながと寝そべるだろう。体を縦に立てる必要がない。二本の脚で立つこともない。四本の手脚を

地面につけて体重を横に散らせながら歩くこともできる。二本の脚だけで胴体を支えねばならない人間と、四本の肢で胴体を支える犬とを較べたら、犬の方がどんなに楽だろう。里子は八つ手の葉の陰で白い犬になつてうずくまる自分の姿を想像してみた。

信吉が碁を打っている。相手は白い石で信吉は黒い石だ。信吉が指の先でぴしっと黒い石を打ったあと、相手がそれをにらんで考えこんでいる。信吉は黒い石をいくつかつかんで掌の中に入れ、左の掌の中から右の掌の中に移し替えては相手がどう打ってくるかと待っている。

信吉はひどい脂性で掌の中にはねとついた汗がいつも滲んでいる。ときどきなにかの拍子に里子と手が触れ合ったりすることがある。信吉の掌の脂が粘つくくからみついてくるような感じがする。そんなとき里子は何度も手を洗う。

信吉の掌のくぼみに黒い碁石が脂まみれになつてのせてある。一つ一つの石が黒光りしながら転がされている。

碁を打ち終ると碁石はそれぞれに分けられて容れものに納められ、相手と信吉は碁盤の前を立ち去った。里子は黒い石をそっと手に取ってみた。信吉の脂を吸って一つ一つが濡れている。里子は自分の掌の中にそれを入れてしばらく転がしてみた。その中でも最もよく光っている碁石を五個ほど掌の中に隠すとそっと立ち上った。

玄関の引き戸を開けて、一步外に踏み出すあたりの地面をシャベルで掘った。大きな井鉢一つ分ほどの穴を掘り、その中に黒い碁石を埋めた。上から土をかぶせ砂利をもとどおりにして、見た眼には掘ったことを分らないようにした。

玄関の戸を開けて一步踏み出せば、誰かの右脚か左脚かが必ず脂まみれの黒い碁石を踏むこと